

# WebデザインにおけるPukiWikiの可能性

ー電子媒体における情報デザインのための事例研究ー

Study on Potential of "PukiWiki" in Field of Web Design - Case Study for the Information Design on Electronic Media

井上貢一

Inoue Koichi

九州産業大学芸術学部

Abstract : There are different idea in "Information Design" between Electronic Media and Print Media. In particular, the feature of the Electronic Media appears in CMS(Content Management System) which attracts attention recently.

In this study, I focus on the PukiWiki which is one of CMS, and report the results of interviews for the user.

Key Word : PukiWiki, Content Management System, Information Design

## 1.はじめに

リンク、複製、随時更新、自己組織化。Webを代表とする電子媒体には紙媒体とは異なる「編集」の発想がある。本研究はその特質を探る事例研究のひとつである。

## 2.研究の目的と背景

Webサイトを構成するテキストや画像などを統合的に管理・配信するシステムを総称してCMS（コンテンツマネージメントシステム）という。CMSには様々なものがあるが、その大半はオープンソースであり、サーバと技術さえあれば誰にでも低コストでその導入・構築が可能である。記事の更新やデザインの変更に關して専門的な知識が必要ないことから、近年Webサイトを持つ多くの企業が、従来型のWebサイトを廃してCMSへ移行するケースが増えており、ページの更新業務もWebの専門家から、当該コンテンツの担当者へと分散される傾向にある。

表1. CMS関連キーワードの話題性

キーワード	Web上の記事	書籍
CMS	558,000,000	663
Wiki	1,340,000,000	474
blog	11,170,000,000	1,410
Drupal	165,000,000	19
Joomla!	429,000,000	20
MediaWiki	241,000,000	15
MovableType	369,000,000	115
OsCommerce	112,000,000	19
PukiWiki	11,600,000	40
WordPress	1,280,000,000	120
Xoops	45,600,000	68
ZenCart	5,880,000	17
HTML (参考)	5,420,000,000	4,910

表1はCMS関連のキーワードをWeb上の記事と関連書籍の数で比較したものである。

これを見る限りblogとその具体例であるWordPressの話題が圧倒的に多いようであるが、GoogleTrends<sup>1)</sup>による検索動向(図1)をみると2007年を境に"Wiki"の検索が"blog"を上回り、その関心は着実に高まっていることがわかる。

そこで本研究では、近年筆者が関わったPukiWiki<sup>2)</sup>を中心に、ユーザの評価とその特質について報告する。

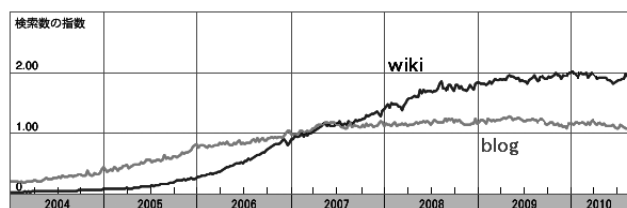


図1. GoogleTrendsによる"blog"と"wiki"の比較

In use of PukiWiki, a boundary of a reader, an editor and an administrator disappears and any user can treat the whole.

There is no need to design information by a web designer. Because there exists the open mechanism that organize information.

## 3.PukiWikiとは

PukiWikiは、インターネット百科事典Wikipediaで利用されているMediaWikiと同様のWikiのひとつで、Webブラウザから簡単にWebページの発行・編集などを行なうことができるCMSのひとつである。結城浩(1963~)によるYukiWikiをyu-jiがPHPに移植したもので、現在はPukiWikiDevelopersTeamがその開発を継続している(図2)。

表1では他のCMSに比較して地味な存在であるが、CMSと比較したサイト<sup>3)</sup>の情報によれば、PukiWikiはその導入やカスタマイズに関する日本語情報が豊富(21件中3位)なCMSとして評価されている。PHP<sup>4)</sup>のみで動作するという軽快さから、他のCMSに比べて導入がしやすく(21件中4位)、大学の研究室のようなグループの「まとめサイト」として、また個人のWebサイト用としても利用が増えている(極端な例ではローカルPC上でのノートとして使用されるケースもある)。



図2. PukiWikiの公式サイト(デフォルトのデザイン)と構成ファイル

## 4.PukiWikiユーザへの聞き取り調査

筆者がその導入に関わったPukiWikiサイトのユーザ<sup>5)</sup>に聞き取り調査を行い、ビジュアルデザイン、インターフェイス、記事の編集、またPukiWikiシステムに対する印象など、閲覧者・編集者・管理者という3つの立場から評価してもらった。サイトの実態から明らかなことであるが、編集権をもつメンバーの意識には温度差が大きい。定量的な調査からは得るものがないと判断し、定性的な調査のみ行うこととした。表2はその結果を整理したものである。



図3. 九州産業大学芸術学部Webサイト



図4. 芸術工学会公式サイト



図5. 船小屋温泉郷公式サイト

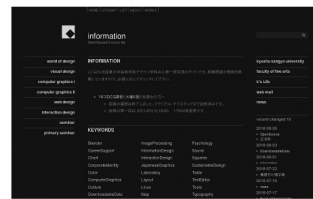


図6. 筆者の個人サイト

表2. PukiWikiに関する評価

閲覧者視点   ビジュアルデザイン・インターフェイスについて
1 デザインには特に要望はない(ページ内は自分で自由にできるので…)
2 オーソドックスな逆L字型の2カラムのレイアウトが良い
3 本文については、白の背景にグレーの文字という組み合わせが良い
4 リンク文字については、青が良い(一般のサイトと同じ方がわかりやすい)
編集者視点   記事の編集について
5 予想外に簡単である(見出しと本文だけならPC初心者でも簡単にできる)
6 リンクが簡単なのでリンク集づくりが楽(メモがわりにもつかえる)
7 メニューバーの編集ができるのが便利(後で全体を整理しなおすことができる)
8 ページ名を後で変更できるのが便利(とりあえず思いついたことをすぐ書ける)
9 他のページの編集内容がお手本になるので学習が容易
10 Wikipediaの編集と同様と聞いて意欲が湧いてきた
11 凝ろうと思えば、細かいところまで編集ができる(学習意欲が湧く)
12 写真のアップ(掲載)が難しい(ブログと比較して)
13 blogは「投稿」、wikiは「編集」
管理者視点   PukiWikiの導入・管理等について
14 よくわからない(ブログとはちがうという程度しか…)
15 大勢で編集しているわりにはトラブルがない(信頼性が高い)
16 自分の個人サイト(HTML, ブログ)もWikiへ移行することを考えている
17 HTML・CSSの知識があるので、自分でもカスタマイズできそうな気がする
18 フォルダをまるごと転送するだけ…という扱いやすさが良い
19 すべてのファイルが読めるので学習意欲が湧く
その他
20 更新すると「最近更新したページ」に出るので便利
21 ページごとのカウンターが更新へのモチベーションを高める
22 他者への情報発信というより自分のために活用している

## 5. 考察

### 5.1. 閲覧者視点の評価

多くのユーザがオーソドックスな逆L字2カラムを好むようである。メニュー項目の増減が前提となるシステムでは、それらを左カラムに縦に並べるのが妥当であり、画面のレイアウトは必然的に一定の形(逆L字)に収斂すると考えられる。

また、興味深いのは「ビジュアルにはこだわらない」という感覚である。ビジュアルに凝ると参加者による編集の自由を制限してしまうという理由もあるが、内容(HTML)と表現(CSS)が独立するWeb標準のシステムでは、ビジュアル(スキン)の変更はいつでもできる。実際、PukiWikiをデフォルトのまま使っているサイトも多く「ビジュアルは後回し。とりあえず情報を出すのが先」という発想は特別なものとはいえない。余計な装飾はせず、編集可能性を最大にするデザインが正解といえる。

### 5.2. 編集者視点の評価

編集は予想外に簡単であり、モチベーションも高まる傾向にあることがわかった。ブログは「投稿」Wikiは「編集」。情報の構造が固定されている日記の投稿とは異なり、WikiではHTMLによるページ作りと同等の自由度がある。Wikipediaの編集と記法が同様である点も、ユーザの学習意欲を喚起するようである。また、メニューバー自体が簡単に編集できるという点のメリットを評価する声も多かった。目次が先にあるのではなく、個々のページが先にあって、それらが相互にリンクするうちに合理的なメニュー構成へと自己組織化する。情報はユーザの手によって自然にデザインされるのである。

### 5.3. 管理者視点の評価

PukiWikiの導入・管理といった専門的な質問には「よくわからない」という返答が大半であったが、システムの信頼性の高さを評価するユーザは多かった。実際、これまで関わったサイトでは、PukiWikiのトラブルは皆無である。

HTMLによるページ制作の経験のある参加者からは「将来的に移行を考えている」という声も多かった。システム全体が1つのフォルダにまとまっていることと、すべてがテキストファイルとして読める点が、学習意欲を喚起するようである。

### 5.4. その他

自分自身の情報整理のために使う…という点も特筆すべき点であろう。他者へむけて情報を発信することから、自分自身が持つ情報を体系的に整理することへと関心が移っていく点も、PukiWikiユーザの特徴といえる。

## 6. まとめ

複数の人間の共同参画を前提としたWikiにおいては、その内容や形式のみならず、閲覧者・編集者・管理者の関係も動的に変化する。すなわち、それぞれの境界が消失し、一個人がそのすべてに関わるのが可能になるのだ。標準かつオープンな仕様と高い信頼性が、ユーザの学習意欲を喚起するためである。

PukiWikiのようなCMSにおいては、Webデザイナーによる情報のデザインは必要ない。そこにはすでに情報が自己組織化するためのオープンな仕組みが存在しているのである。

情報のデザインは「生産完成品」としてではなく、再生し続ける「生産性」としてユーザの手に委ねられる。

註)

1) <http://www.google.co.jp/trends/> (閲覧: 2010.07.31)

2) <http://pukiwiki.sourceforge.jp/>

3) <http://opensourcecms.blog122.fc2.com/> (閲覧: 2010.08.29)

4) PHP (HypertextPreprocessor): 動的なページ生成を目的とした言語。

5) 筆者が関わったPukiWikiの導入事例には、九州産業大学芸術学部(図3) 芸術工学会(図4)、船小屋温泉郷(図5)、筆者自身のサイト(図6)、また、九州産業大学国際交流センター、アートスペース模などがある。